

2月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

こんなに雪の少ない厳寒期2月は会津に住んでからは記憶がない。おかげさまで雪かきをすることは一度もなかった。雪かきトレーニングがなくなり、筋力と対寒力の低下を招くことになった。人生色々、良いこともあれば悪いこともある。水泳池江選手の白血病にはびっくりした。改めて「人生一寸先は闇」を覚悟させられ、日々大切に生きなければならぬと痛感させられた。闇から光を得たのは日本男子バスケットボールのワールドカップ出場権獲得である。悲喜こもごもの2月だった。

1・読書から

◆「愛とは結局、いつもさめていこうとする幻影をどこまでも保とうとする努力にあると
いってよいかもしれない」(梅原猛『日常の思想』・集英社)

現役時代バスケットボールをこやなく愛していた先輩諸氏が、いつのまにか私の前から姿を消してしまう。何事もずっと好きで、愛し続けることは努力が必要なのだろう。

◆「自分がいるべき場所より1ステップ、2ステップ上の場所にいるからこそ、その場所にフィットさせようと努力できるし、成長できる」(東海大諏訪高校コーチ・『月刊バスケットボール』) 自分の実力などわからない。なのに自分で決めつけて狭い世界で能力を開花させないのは不幸である。広い世界、高い世界に自ら飛び込む勇気を持ってほしい。

◆「多くの方が“何をしているか(WHAT)”や“どのようにしているか(HOW)”に対する問いには答えられる一方で“なぜしているか(WHY)”について答えられる人はほとんどいない」(『コーチングクリニック』ベースボールマガジン社) 強いチームの練習、変わった練習に惑わされて、「なぜこの練習をするのか」を説明できずに真似していないだろうか。「信は力なり」。信は「なぜ？」を説明できることにある。

2・新聞、雑誌のコラム等から

◆「中年男性には“コンプレックスで胸が張れない”のではなく“胸を張らないからコンプレックスにつぶされる”と言い換える」(朝日・書評・橋本治のかけこみ人生相談)

弱いチーム、弱い選手は声が出ない、元気が出ない。だったら大声を出せば元気になれる。元気になれば練習が充実し実力がつく。こんな簡単なことに選手は気づかない。

◆「おじいちゃん、おばあちゃんの最後のつとめは、孫や家族に自分が死ぬところを見せることではないか」(朝日・折々のことば・池田清彦)

孫たちにおみやげを買って喜ぶ顔を見たくて、絶対行くまいと思っていた「100円ショップ」デビューを果たした。今は物でつっているが生きざまでつれるようになりたい。

◆「“ものわりのよさ”こそ、私たちが駆逐しなければならない最大の敵である」(朝日・折々のことば・稲垣喜代志)

空気を読むとか、老後のことまでそつなく考えることに異を唱えた人の言葉。目指すは、流行を泳いで溺れない、独りよがりにならず、自前の道をそつと歩くソロ・サピエンス。

◆「やれるとは言い切れないけれど、やれないことはない」(朝日・J1大分・岩田選手) 3季前までサッカーJ3で戦っていたチームが開幕戦でJ1のアジア王者を撃破した。アップセット、ミラクルを起こすチームの心理状態はこのようなものだろう。